優秀賞　独立行政法人水資源機構理事長賞

水不足を経験して

宮崎県立宮崎西校等学校附属中学校
一年　中村　由希帆

「次は体育館の床を片付けて。急いで!!」

私が水不足を経験したのは三年前。あれは思い出しても大変だったとしかいいようがない『台風十四号』。そのとき四年生だった私は、台風が過ぎ去った後の見慣れた町、穆佐を見て息をのんだ。道路に散らばった家具、本、水につかった家々から出された生活用品、毛布やベッド。これが本当にいつもすごしてきたあの町なのか……。

私の家は高い所にあったため、水につからずに済んだが、下の方の地区では、家の中の家具を全て失った家族、一階建てだったため屋根に登って避難した家族もあった。学校は二メートルも水につかった。そのため六年生は夏休みに学校の片付けに行き、家がつかった人はそれぞれ自分の家を片付けた。私は家がつからなかったため、兄と学校の片付けを手伝いに行った。

水につかった後の学校は私の想像よりもはるかにひどかった。ボコボコになった体育館、先生たちの大切な資料が散乱した職員室、コピー機や放送機器などの機械類が全てこわれた事務室、実験道具が流された理科室、低学年が使う勉強道具の残がい、一匹もいなくなった金魚たち。どれを見ても驚くしかなかった。そしてそうじが始まった。そうじをしていく中で一番つらかったのは水が出なかったことだった。水道から出ない限り、山に雨水をくみに行くか、水が出る家にもらいに行くしかなかった。水が出ないことがこんなにつらいこととは知らなかった。

「水につかった家は大変だろうな……。」

と私は思いながら、一生懸命学校を片付けた。高校生が手伝いに来てくれ仕事がはかどった。テレビ取材も来た。テレビを見てくれた人たちからの励ましのメッセージや募金を見て、がんばろうという気持ちになれた。

片付けはだいぶ進んだ。散乱しているゴミを拾う、重い木材や機械を運ぶ、どれもきつかった。水くみなんか、バケツを両手に山を登る、そして雨水をためる、重いバケツを両手に山を下る、水が必要な所へ持っていく……。これのくり返しだった。腕と足がおかしくなるかと思った。こんなにがんばっても復旧はなかなか終わらず、大変な日々が続いた。やっと片付けが終わりみんなであびた山の雨水はすごく気持ちよく、今までの疲れを忘れさせてくれた。そして、水道が直り、久しぶりに飲んだ水は、この世のものとは思えぬくらいおいしく、体全体にしみわたっていくようだった。

「家が水につかる」という体験をしたことがある人はそう多くないと思う。実際につかっていない私でもこの台風は私の人生にとって何か大きなものになった気がする。水はこんなにありがたいもので、おそろしいものだと改めてわかった。水がないと何も生活できないし、水を飲まないと生きていけない。しかし水は一瞬にしてたくさんの人の大切なものを奪ってしまう。友達の中には、教科書やランドセル、大切なものを全て失った人もいた。おそろしいことである。

こんな体験をした日から、私は水の使い方を考えるようになった。普段なんとなく使っている水だが、どうしたら無駄なく使うことができるだろう？

考えるようになった時から水を意識して使うようになった。手を洗うとき、歯をみがくとき、洗たくや皿洗いをするとき……。これだけのことをたくさんの人がすれば……。

今、地球温暖化が問題になっているが、私はこういう身近な所からたくさんの人が考えて、気にするようになればいいと思う。そうすれば、これからの未来が明るく見えてくる気がする。

これからの時代、私達が水を守っていかなくてはならないのだ。